文法配列について
－ 中学校検定教科書の場合 －

Grammar Sequence in Textbooks for Junior High School Students

前原 由幸
Yoshiyuki MAEHARA

0. はじめに

現在実施されている学習指導要領の一つの特徴に、文法項目の学年指定の廃止がある。これにより、より自由な配列が可能になった。そこで、3種類の中学校用の教科書について、文法項目の配列の実態を、3つの点で、比較、検討した。用いた教科書は、Crown, Horizon, Sunshine の3種類の平成9年度版の教科書である。

1. 学習指導要領

最初に中学校学習指導要領の言語材料についての記述を確認しておきたい。便宜上実際の記述とは、順序を変えながらあげていく。

各学年とも、言語活動と言語材料について、次のように示されている。

(1)の言語活動は、別表1に示す言語材料のうちから、1の目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いて行わせる。

(1)の言語活動とは、後に示すようにそれぞれの学年について、述べられている。各学年の目標にふさわしい材料を学年のわくにとらわれることなく選択することが可能になっている。別表1を次にあげる。

別表1　言語材料

ア　音声
- (ア) 現代の標準的な発音
- (イ) 語のアクセント
- (ウ) 文の基本的な音調
- (エ) 文における基本的な区切り
- (オ) 文における基本的な強勢

イ　文
- (ア) a　単文及び重文
  - b　複文
- (イ) 肯定及び否定の平叙文
- (ウ) 肯定及び否定の命令文
- (エ) 疑問文のうち、動詞で始まるもの、助動詞can, do, does, may などで始まるもの、orを含むもの及び疑問詞 how, what, when, where, which, who, whose, why で始まるもの

ウ　文型
- (ア) 主語＋動詞　の文型
- (イ) 主語＋動詞＋補語　の文型のうち、動詞がbe動詞で補語が名詞、代名詞及び形容詞である場合並びに動詞がbe動詞以外で補語が名詞及び形容詞である場合。
- (ウ) 主語＋動詞＋目的語　の文型
  - a　目的語が名詞、代名詞、動名詞及び不定詞である場合
  - b　目的語がhow など＋不定詞、thatで始まる節及びwhatなどで始まる節の場合
- (エ) 主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語　の文型
  - a　直接目的語が名詞及び代名詞の場合
  - b　直接目的語がhow など＋不定詞の場合
- (オ) 主語＋動詞＋目的語＋補語　の文型のうち、補語が名詞及び形容詞である場合
- (カ) その他の文型
  - a　There is及びThere are の文型
  - b　It＋be 動詞＋～(＋for ～)＋to不定詞　の文型
  - c　主語＋ask, tellなど＋目的語＋不定詞　の文型

エ　文法事項
(ア)　代名詞
a　人称、指示、疑問、数量を表すもの
b　関係代名詞のうち、主格のthat, which, who及び目的格のthat, whichの制限的用法の基本的なもの
(イ)　動詞の時制のうち、現在形、現在進行形、現在完了形、過去形、過去進行形及び未来形
(ウ)　形容詞及び副詞の比較変化
(エ)　不定詞の、名詞としての用法、形容詞としての用法及び副詞としての用法のうち目的を表すものと原因を表す基本的なもの
(オ)　動名詞のうち、動詞の目的語となるもの及びそれ以外の基本的な用法
(カ)　現在分詞及び過去分詞の形容詞としての用法
(キ)　受け身のうち、現在形及び過去形
オ　語及び連語
(ア)　別表2に示す語を含めて、1000語程度までの語
(イ)　連語のうち基本的なもの
カ　文字
(ア)　アルファベットの活字体及び筆記体の大文字及び小文字
キ　符号
(ア)　終止符、疑問符、コンマ、感嘆符などの符号の基本的な用法

ただし、言語材料は、これがすべてというわけではない。材料の取り扱いについて次のようにある。

3　内容の取扱い
(1)　言語活動を活発にするために、別表1に示す言語材料以外に、話し手や聞き手の考え、感情などを表現するのに必要な言語材料のうち基本的なものを取り上げても差し支えない。
(2)　別表1に示す言語材料のウの(エ)のbについては、理解の段階にとどめるものとする。
(3)　別表1に示す言語材料のエの(ア)のbについては、理解の段階にとどめるものとする。

こうした言語材料を用いての目標は次のように、記されている。

第1　目標

外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う。

これまでは、全体の言語材料、目標であったが、各学年ごとにも、目標、および内容が次のように定められている。文法項目の配列については、学年の指定はなくなっているが、各学年の目標と内容は述べられている。

〔第1学年〕

1　目標
(1)　身近で簡単なことについて話される初歩的な英語を聞いて理解できるようにするとともに、英語を聞くことに親しみ、英語を聞いて理解することに対する興味を育てる。
(2)　初歩的な英語を用いて、身近で簡単なことについて話すことができるようにするとともに、英語で話すことに親しみ、英語で話すことに対する興味を育てる。
(3)　身近で簡単なことについて書かれた初歩的な英語を読んで理解できるようにするとともに、英語を読むことに親しみ、英語を読んで理解することに対する興味を育てる。
(4)　初歩的な英語を用いて、身近で簡単なことについて書くことができるようにするとともに、英語で書くことに親しみ、英語で書くことに対する興味を育てる。

2　内容
(1)　言語活動
英語を理解し、英語で表現する能力と態度を養うため、次の言語活動を行わせる。
ア　聞くこと
主として次の事項について指導する。
(ア)　語句や文の意味を正しく聞き取ること。
(イ)　質問、指示、依頼、提案などを聞いて適切に応ずること。
(ウ)　数個の文の内容を聞き取ること。
イ　話すこと
主として次の事項について指導する。
(ア)　語句や文をはっきりと正しく言うこと。
(イ)　あいさつ、質問、指示、依頼などに適切に応答すること。

(ウ) 伝えようとすることを簡単な文で話すこと。

ウ 読むこと

主として次の事項について指導する。

(ア) 語句や文をはっきりと正しく音読すること。

(イ) 質問、依頼などの文を読んで適切に応ずること。

(ウ) 数個の文の内容が表現されるように音読すること。

エ 書くこと

主として次の事項について指導する。

(ア) 語句や文を正しく書き写すこと。

(イ) 語句や文を聞いて正しく書き取ること。

(ウ) 伝えようとすることを簡単な文で書くこと。

(2) 言語材料

(1)の言語活動は、別表1に示す言語材料のうちから、1の目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いて行わせる。

〔第2学年〕

1 目標

(1) 初歩的な英語の文や文章を聞いて、話し手の意向などを理解できるようにするとともに、英語を聞くことに慣れ、英語を聞いて理解しようとする意欲を育てる。

(2) 初歩的な英語の文や文章を用いて、自分の考えなどを話すことができるようにするとともに、英語で話すことに慣れ、英語で話そうとする意欲を育てる。

(3) 初歩的な英語の文や文章を読んで、書き手の意向などを理解できるようにするとともに、英語を読むことに慣れ、英語を読んで理解しようとする意欲を育てる。

(4) 初歩的な英語の文や文章を用いて、自分の考えなどを書くことができるようにするとともに、英語で書くことに慣れ、英語で書こうとする意欲を育てる。

2 内容

(1) 言語活動

英語を理解し、英語で表現する能力と態度を養うため、次の言語活動を行わせる。

ア 聞くこと

主として次の事項について指導する。

(ア) 自然な口調で話されたり読まれたりする文や文章の内容を聞き取ること。

イ 話すこと

主として次の事項について指導する。

(ア) 相手の言うことを聞き取って適切に質問したり応答したりすること。

(イ) 聞いたり読んだりしたことについて問答すること。

ウ 読むこと

主として次の事項について指導する。

(ア) 文や文章の内容を考えながら黙読すること。

(イ) 文や文章の内容を理解して、その内容が表現されるように音読すること。

エ 書くこと

主として次の事項について指導する。

(ア) 書こうとすることを整理して、大事なことを落とさないように書くこと。

(2) 言語材料

(1)の言語活動は、別表1に示す言語材料のうちから、1の目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いて行わせる。

〔第3学年〕

1 目標

(1) 初歩的な英語の文章を聞いて、話し手の意向などを理解できるようにするとともに、英語を聞くことに習熟し、英語を聞いて理解しようとする積極的な態度を育てる。

(2) 初歩的な英語の文章を用いて、自分の考えなどを話すことができるようにするとともに、英語で話すことに習熟し、英語で話そうとする積極的な態度を育てる。

(3) 初歩的な英語の文章を読んで、書き手の意向などを理解できるようにするとともに、英語を読むことに習熟し、英語を読んで理解しようとする積極的な態度を育てる。

(4) 初歩的な英語の文章を用いて、自分の考えなどを書くことができるようにするとともに、英語で書くことに習熟し、英語で書こうとする積極的な態度を育てる。

2 内容

(1) 言語活動

英語を理解し、英語で表現する能力と態度を養う

ため、次の言語活動を行わせる。

ア　聞くこと

主として次の事項について指導する。

(ア) まとまりのある文章の概要や要点を聞き取ること。

イ　話すこと

主として次の事項について指導する。

(ア) 話そうとすることを整理して、大事なことを落とさないように話すこと。

ウ　読むこと

主として次の事項について指導する。

(ア) まとまりのある文章の概要や要点を読み取ること。

エ　書くこと

主として次の事項について指導する。

(ア) 聞いたり読んだりしたことについて、その概要や要点を書くこと。

このように、活動内容と言語材料が指定されているが、これらの項目の提示の順番は指定されていない。そこで、その実態を3種類の教科書で調査してみた。主に、3点について調べた。この3点を選んだのは、述語に関係する事項、構文に関係する事項、名詞に関係する事項の3点を考慮に入れながら、時間を表す表現、主語・述語関係を含む構文、名詞を修飾する構文を調べた。

1. 時間を表す表現

述語に関係する事項の中では、時間を表す表現について調べてみた。英語の時間を表す表現のなかでは、述語動詞が関係している表現には、現在形、過去形、未来の表現(will, be going to ～)、進行形、現在完了形が教科書では取り上げられている。

これらの取り上げられる順序は、3種類すべての教科書において、

現在形→現在進行形→過去形→過去進行形→未来→完了形

の順番になっている。過去形が1年生の最後の課であり、完了形が3年生の最初の頃に学習されることになる。未来を表す表現については、SunshineとHorizonがbe going to ～ から導入され、次にwillを導入するという順番になっている。Crown は、逆の順序である。また、すべての教科書が、willを助動詞として、mustと同じ課で導入されている。未来を表す助動詞という扱いである。Sunshine 、Crownでは、順序は逆であるが、willとbe going toは、隣接する課で導入されている。助動詞については、早い時期に、canだけが導入さることは、共通している。これは、早い時期の表現の多様性に対応するためであろう。

文法配列の基準を、「易」から「難」ということを基本と考えると、何を基準にして難易をとらえるかが問題になる。時間の表現についての基準とは、動詞の形の有標性に求めることができる。現在形が無標であり、完了形へ向けて有標性が高くなる。動詞の語形の変化を伴う、過去形、完了形は身につき難いと考えられている。

これは、語形からみれば、このようになるが、意味の点から考えた場合には、少々事情が異なる。現在形の表す意味は、易しくはない。特に、動作を表す動詞の場合には、単純な現在形よりは、進行形や過去形のほうが理解しやすいであろう。

時間表現は、述語が関係しているので、述語の意味が問題となる。各教科書とも最初に、be動詞、次に、状態動詞、動作動詞の順番で導入している。動作動詞が問題になる。動作動詞が単純な現在形で用いられるのは、習慣を表す場合が多く、このような場面が想定されて、導入されている。初期段階での目標は、身近なことの表現であるから、日常の習慣的な動作が、設定されている。3つの教科書から、動作動詞が初めて出てくる文を拾うと次のようになる。いずれも、習慣を表している。

I play the drums every day. (Horizon 1, p.26)
I play the piano. (Sunshine 1, p.16)
I practice it at school. (Crown 1, p.27)

過去形を用いることができれば、動作動詞を用いた表現はより自然にできる。動作動詞については、現在形と過去形を同時に導入するといった方法も考えられるであろう。文法の有標性にこだわらずに、導入を進めれば、活動は豊かにできると考えられる。複雑になり、習得が困難になるという恐れはあるが、形の複雑さは、必ずしも、難しさとはいえないであろう。意味内容が実感しやすほうが、理解は容易であろう。過去形の形の変化は、3人称の現在の場合よりは、理解しやすいであろう。それは、3人称という概念は、日本語との相違を考えると、理解が難しそうである。

述語動詞の意味と時間表現は、切り離せないものであり、言語活動の基本であるから、初期の段階で、すべてを導入してしまう必要があろう。そうすることで、表現を広げることができる。単語の有標性にこだわらずに、過去形をもっと早い時期に導入してよいと思われる。言語の体系の理解から、言語の使用へと目標がかわりつつある中では、このような大胆な変更も可能であろう。

2. 主語・述語関係を含む構文

すべての教科書で、1年生の段階では、SV, SVO, SVC(ただし、動詞はbe動詞に限られている)の構文から構成されている。これを、さらに発展させる場合には、それぞれの要素を複雑にする方向へ向かうとか、要素を増やす方向へ向かうかのどちらかである。前者の場合の一つの例として、SVOのOが節になるタイプや、不定詞になるタイプがある。また、後者のタイプとしては、SVOC, SVOOの構文がある。次にこうした2つの方向性に共通して問題になる文に内在する主語・述語関係について考えていく。

文の中に2つの動詞が出てくる場合、複雑な構文になってくる。主語・述語関係が、一つの文の中に何らかの形で、2つ考えられるからである 文中に動詞が2つ以上出て来る構文は、いろいろあるが、中学校指導要領の範囲では、次のようなものがあがることになる。Crown の例を代表としてあげる。

接続詞を用いた文
When I am happy, I call my friend. (2 Lesson 6)

目的語が文の場合
I know that she lives in Hiroshima. (3 Lesson 4)
You may ask what this is. (3 Lesson 8)
He asked me how to go there. (3 Lesson 8)

不定詞
Some will work to help old people. (2 Lesson 7)
I want to be a teacher. (2 Lesson 7)
I have a lot of things to do. (2 Lesson 7)
He wanted me to take a picture. (3 Lesson 7)

動名詞
I like studying languages. (2 Lesson 8)

SVOC
They call her Chako. (3 Lesson 4)
This photo made him famous. (3 Lesson 7)

他の2つの教科書でも扱われている構文は同じである。節では、接続詞を、用いた複文と、that節に導かれ動詞の目的語になる場合である。句では、不定詞、動名詞がある。さらに、SVOCも主語・述語関係が内在すると考えられるので、ここでとりあげる。

一つの文の中に主語・述語の関係が2回出てくる場合は、形の上では、 節の方が複雑で、長い文になるが、意味を考える場合には、多くの単語を費やしての表現であるから、理解しやすい。実際に教科書では少々の相違はあるが、節から入っている。通常の文とほぼ同じ方法で組み立てられる節の方が、有標性が低いということになろう。

さらに発展させた形に、SVOCの構文が考えられるが、この形は、make、call を用いて導入されているが、その順序は2つに別れている。Crown、Horizonでは、callは、that 節より先に、makeはthat節の後で導入されている。一方、Sunshineでは、ともにthat節の後で導入されている。SVOC に対して、OとCの関係を主語・述語との相似性からとらえるには、目的語がthat節の場合が先に学習されている必要があろう。

不定詞と動名詞を考えると、動名詞の方が、働き、構文の点で単純である。しかし実際は、3種類すべてにおいて、不定詞が先になっている。「易」から「難」へという原則からは、はずれる。不定詞のほうが発展性があるためであろう。不定詞はさらに、仮主語のItの構文、そしてSVOOの構文へと展開していくことになる。

主語・述語関係ということは、語順の言葉である英語においては、重要な関係であり、様々な形態がある。不定詞や、SVOC構文を考えると、主語・述語関係に対して体系的な考慮は、あまりされていないようである。

3. 修飾構文

英語の修飾の方法は、日本語とは異なる。特に、名詞が後ろから修飾されることは、原則として、日本語では行われないが、英語ではよくみられる。

Mを修飾語、Nを名詞とすると、日本語では、名詞を修飾する要素と名詞の語順は、

M ＋ N

という語順になる。一方、英語では、

M ＋ N

という語順に加え、

N ＋ M

という語順も可能である。

前者の場合には、修飾要素としては、形容詞、動名詞、分詞などが考えられる。一方、後者の場合は、形容詞、分詞、前置詞、不定詞、関係代名詞などが考えられる。後者の日本語には見られない構文について、調べてみる。

学習指導要領の中では、このように後ろから名詞を修飾する修飾関係にあたる文法項目としては、不定詞、分詞、関係代名詞があげられている。Horizon からの例をあげる。

I want something to read. (2 p.45)
This is a famous picture taken in 1934. (3 p.41)
This is the pen I lost yesterday. (3 p.49)
I have a friend who lives in Sapporo. (3 p.52)

前置詞が名詞の後ろに置かれて、名詞を修飾するということや、形容詞は、前後の位置に現われうるということは、とくに記述は見られない。修飾という現象を体系的には考えられていないようである。

3種類の教科書ともに、関係代名詞と分詞、不定詞については、大きく取り上げれている。順番については、不定詞→分詞→関係代名詞(Sunshine, Horizon)と不定詞→関係代名詞→分詞(Crown)と2つに別れている。不定詞が最初に出て来る点は共通している。

不定詞には、副詞的用法、名詞的用法があり、修飾との関係だけでは、その性質を決められない構文である。そのために、先に導入されているのであろう。

他の２つについては、分詞の後置修飾を関係代名詞との関係から考えるか、逆に、分詞の後置用法から関係代名詞を考えるかの問題になる。関係代名詞と分詞の関係は、目的語のthat節とSVOCの関係と同じであろう。節から句へとしたほうが、意味の理解をすすめる点では、言葉が多いだけに、分かりやすいであろう。一方「易」から「難」へということを考えた場合には、構造的には、短い方がやさしく、長い方が難しいと見えるので、短いものから長いものへということになる。こうした視点が、混在している。

一方同じ後置修飾でも、前置詞の場合には、実際には、次のように、かなり早い時期に出てはいるものの、関係代名詞や分詞のように大きく扱われていない。

the people at the top (Sunshine 1, p.57)
I'm on my way to the room. (Horizon 1, p.77)
the girl with short hair (Horizon 1, p.79)
many riddles like this (Crown 1, p.50)
the time in New York (Crown 1, p.58)
a school for parent dogs (Crown 1, p.82)

修飾という仕組みは、日本語と英語の違いが大きい部分であるが、体系的に取り組まれてはいないことがわかる。教授者の判断にまかされることになる。

織田(1997)は、学習指導要領の記述が、5文型、8品詞にとらわれていると指摘している。修飾については、確かに、その影響が見て取れる。文全体の構造を考えることはできるが、さらにこまかな、節、句レベルのとらえ方が上手くいかないのは、このあたりにその原因があると言えよう。単語のレベルについては、「(ア)別表2に示す語を含めて、1000語程度までの語(イ)連語のうち基本的なもの」と記述があり、文についてはそのぞれの構文があげられている。前置詞の名詞の修飾のような現象は、どちらのレベルでもとらえられてはいない。不定詞、分詞、関係代名詞を考えると、修飾という視点ではなく、それぞれ文の構造という視点が優先されているようである。修飾という現象に体系的なアプローチはとられていない。修飾は、日本語と英語では異なるしくみを持っている。そのしくみを体系的に考えることは、さらに複雑な構文、長い文に取り組む時に、生きてくると思われる。

4. まとめ

3つの事項について、調べてきたが、単純な構造から、複雑な構造へとすすめながら、豊かな言語活動へ発展させていることが読み取れる。しかし一方では、修飾に対する取り組みに見られるように、手が回らない部分も見られる。全体を通して、体系的な文法への配慮はあまり感じられない。その原因は、伝統的な文法に対する考え方の問題から派生するものであろう。体系的な配列は、わかりやすさへとつながるだけでなく、将来の発展とも関係してくるであろう。

伝統的に行なわれている5文型は、文を要素に分け、その要素が文中でどのように関係しているかということで決められている。しかし節、句の構造までを5文型で扱うことはできない。また、8品詞では、単語をどう考えるかということで、ここでも、節、句の構造

は、扱えない。伝統的な5文型、8品詞を基本にすえつつも、さらに、節や句などの構造をとらえる文法研究や、難易を考え、配列を決める上での認知的な側面を考慮した文法研究が今後とも必要である。また、さらに、言語活動を手助けする機能的な側面の研究も必要とされよう。

文法配列が自由になったことで、文法研究の成果が盛り込みやすくなる。文法面から、言語活動への貢献は、正確さということにとどまらず、適切さも含められる。今後の文法研究が進められ、その成果が反映されることが期待される。

参考資料

SUNSHINE ENGLISH COURSE
池浦貞彦　監修　開隆堂
NEW HORIZON English Course
浅野　博、下村勇三郎、牧野　勤　監修　東京書籍
NEW CROWN ENGLISH SERIES
森住衛 他著　三省堂

参考文献

文部省(1988)「中学校 学習指導要領」大蔵省印刷局
文部省(1988)「中学校指導書　外国語編」開隆堂
長勝彦(1993)「新・指導要領によって中学校英語教科書はどう変わったか」英語教育9月増刊号
織田稔(1997)「文法用語の虚実---何が生徒を惑わすのか」現代英語教育8月号

（受理年月日 1997年９月26日）